

# 被爆地結ぶ「平和のバラ」物語

## 永井博士 紙芝居に

原爆の被害を受けながらも、長崎市の被爆者の救護活動に尽力した故永井隆博士の紙芝居を広島市の市民グループが制作した。タイトルは「永井博士の平和のバラ」。長崎と広島両市の市民が原爆からの復興を目指して交流を始めたことを祝い、永井博士が広島市にバラの花を贈った実話を題材としている。



紙芝居はバラに宿る妖精が、永井博士の生い立ちや被爆者の救護活動、白血病と闘いながら書き残した著作、広島市にバラが届いた経緯を紹介するストーリー。A2判18枚で「みんなが平和を願いますように」という品種。1949年に広島市役所の敷地に植樹された後、広島市の平和大通りの歩道脇や広島市植物公園、長崎市と島根県雲南市の永井隆記念館などに株分けされた。2013年に平和大通りのバラが衰弱した

による柔らかいタッチに仕上げた。  
バラは永井博士の自宅の庭に咲いていた「レッドラジアンズ（赤い輝き）」

### 広島市の市民グループ制作

### 長崎市に寄贈

平和になるよう行動できませぬように」と結んでいる。募った浄財の一部を紙芝居の制作費に充てた。

広島市民13人でつくる「広島・長崎原爆都市青年友好平和のバラ保存委員会」が7月に制作した。絵は市内の絵画教室の生徒が協力し、パステルと色鉛筆で描かれた。紙芝居は3セット作り、広島市子ども図書館や長崎市と雲南市の永井隆記念館に寄贈。保存委員会のメンバーの片岡一寿さん(52)は「長崎と広島市の市民で手を取り合い、永井博士の平和への思いを次世代に伝えたい」と語った。(御厨尚陽)

故永井隆博士の平和への思いを伝える紙芝居を読み上げるバラ保存委員会のメンバー 11月2日、広島市中区